

千原光雄：中国における藻類研究の現状 (3) Mitsuo CHIHARA: Phycological research activities in China (3)

3. 中国科学院水生生物研究所 (武漢) Institute of Hydrobiology, Academia Sinica (Wuhan) 武昌珞珈山

ここは中国における陸水生物の一大総合研究センターともいべき研究機関である。武漢は漢口、漢陽及び武昌の三都市から成り、中国の中央部の長江(揚子江)と漢水とが合流する地点にあり、鉄の産地として、また稲作の主要地として知られる。国立水生生物研究所は武昌の風光明媚な東湖にあり、武漢飛行場より武漢長江大橋を経て到着する。この研究所は最初上海にあったが、1955年に現在地に移転した。当時の職員は僅かに40名に過ぎなかったが、現在は約400名に増加している。研究室(部)は次の6つで、ほかに図書室、技術室、養殖場及び調査船数隻をもつ。研究室名は1) 魚学研究室 2) 魚類遺伝学・育種学研究室 3) 魚病学研究室 4) 生態学研究室 5) 藻学研究室 6) 水質汚染研究室である。職員の内訳は研究員約200名、管理者・作業員約200名で、現在研究所が主に力を注いでいるテーマは次のようである。1) 淡水資源の調査 2) 淡水有用生物特に魚類の新品種の育成・養殖及び疾病の予防、3) 淡水生物の生態調査 4) 窒素固定の研究と稲作への実用化 5) 農業汚染の防除 6) 中国淡水動物誌と淡水藻誌の編纂。

さて藻学研究室 (Department of Phycology) の構成と研究活動はどのようであろうか。藻学者である副所長の黎尚豪教授 (S.-H. Ley, 以前は Li と綴った) の説明によると、この研究部門は次の6組 (sec-

tion) から成り、研究員数は37名であるという。次に研究組(研究室)と組長(室長)の名及び研究員数を記す。1) 藻類実験生態学組(王乾麟, 9) 2) 藻類生物化学・窒素固定組(林惠民, 5), 3) 藻類遺伝学組(王業勤, 2) 4) 藻類光合成組(張憲孔, 4) 5) 藻類応用組(俞敏媚, 5) 6) 藻類分類組(饒欽止, 10)。藻学研究室の主要研究テーマは大きく二つあって、一つは窒素固定の研究とその稲作への利用の研究であり、他の一つは中国淡水藻誌の編纂である。上記の1)~5)の研究組は黎教授をリーダーとし、主に藍藻 *Anabaena* をとりあげて、水田の生産力増大効果実験、突然変異による藍藻の新品種の開発と育成、窒素固定の生理生化学特性の解明等に力を注いでいる。まさに窒素固定に関する一大プロジェクトが進められているといった印象である。なお、生態研や水質汚染研などの他の部門と連絡をとりながら赤潮・水の華の研究も始めつつあるとのことであり、また小規模ではあるが、藻株保存も行っている。現在の保存株は約150という。この藻学研究部門では生理生化学的研究も進められていることから、アミノ酸分析器や超音波遠心分離器等の機器も備えつけられており、また建物は別棟になるが、機器分析室があり、ここにはパーキン・エルマーのガスクロマトグラフ(気相層析機)や東ドイツ製の分光光度計等が備えられている。しかし、一般的には、建物の古さと研究機器の不足に絶えず悩まされているとのことであった。新しい研究棟の建設は既に話題に上っているとの由で、応接室の壁面には東



中国科学院水生生物研究所 (武漢)。図左、藻類分類学研究室にて。左より筆者、黎副所長、陳研究員。図右、セミナーに続く学習を終えて。左より俞研究員、筆者、黎副所長(立っている人)

湖を望んでたつ近代的な高層建築の研究所の設計図が揚げられていた(図右参照)。

第6組の藻類分類学研究組は中国藻類誌のうち、淡水藻を担当する中心グループで、饒欽止教授(C.-C. Jao)をリーダーとする10名が藻類のそれぞれの分類群を分担して研究を進めている。私が滞在中に話をかわした研究者と担当の分類群の名を記すと次のようである。李堯英(Y.-Y. Li), 藍藻 輪藻; 施之新, ミドリムシ(裸藻); 魏印心(Y.-S. Wei), 緑藻・渦鞭毛藻(甲藻); 朱憲忠(H.-Z. Zhu), 珪藻・サヤミドロ(鞘藻); 陳嘉祐(J.-Y. Chen) 珪藻(採集が主); 鄔氏(画家)。中国鞘藻目(サヤミドロ目)(1979)をはじめとして多数の研究業績で知られる饒欽止教授は永く病床にあり、残念乍らお会いできない旨のメッセー

ジが別刷とともに届けられた。このことは実に残念であった。一日も早いご恢癒をお祈りしたい。

武漢には1月24日から29日まで滞在した。到着の日降り出した雪は粉雪となって毎日舞った。研究所の方達は「先生歓迎の雪です」と言って下さったが、ホテル以外は暖房がなく、遂に足の指先が霜焼けとなった。「こんどは夏に来たいですね」といったら、「夏は湿度が高く蒸し暑いです。春か秋がよいです」とのことであった。武漢では、湖北省植物研究所や武漢大学等も訪れたが藻類と直接の関係が少いので割愛する。

終りに武漢滞在中にお世話をして下さいました黎尚豪副所長と俞敏媚研究員にお礼を申し上げる。

日本人研究者を記念した藻類の属名

最近発行された Index Nominum Genericorum (本号, p. 67参照)を通覧して、植物の属名に人名に由来するものが相当にある事を感じた。そこで多少注意して、藻類に関するものを抜き出してみた。これに、Indexに収録されていない最近発表されたものも加えると下記のようなになる。

Genus names of algae dedicated to Japanese scientists

<i>Akiyamae</i> SKVORTZOV et NODA	Chlamydomonadaceae	} 秋 山 優
<i>Akiyamamonas</i> SKVORTZOV et NODA	Bodonaceae	
<i>Chiharaea</i> JOHANSEN	Corallinaceae	千 原 光 雄
<i>Hideophyllum</i> ZINOVA	Delesseriaceae	三 上 日出夫
<i>Hiroseia</i> SKVORTZOV	Chlamydomonadaceae	広 瀬 弘 幸
<i>Kurogia</i> YOSHIDA	Delesseriaceae	黒 木 宗 尚
<i>Makinoella</i> OKADA	Oocystaceae	牧 野 富太郎
<i>Mikamiella</i> WYNNE	Delesseriaceae	三 上 日出夫
<i>Nodamastix</i> SKVORTZOV et NODA	Rhizomastigaceae	} 野 田 光 藏
<i>Nodeana</i> SKVORTZOV	Hemiselmidiaceae	
<i>Okamurina</i> ZINOVA	Delesseriaceae	岡 村 金太郎
<i>Tanakaella</i> ITONO	Ceramiaceae	田 中 剛
<i>Tokidaea</i> YOSHIDA	Ceramiaceae	} 時 田 郁
<i>Tokidadendron</i> WYNNE	Delesseriaceae	
<i>Tsumuraia</i> SKVORTZOV et NODA	Chlamydomonadaceae	津 村 孝 平
<i>Yamadaia</i> SEGAWA	Corallinaceae	} 山 田 幸 男
<i>Yamadaella</i> ABBOTT	Helminthocladiaceae	
<i>Yamadaphycus</i> MIKAMI	Delesseriaceae	
<i>Yatabella</i> OKAMURA	Gelidiaceae	矢 田 部 良 吉
<i>Yendonia</i> KYLIN	Delesseriaceae	遠 藤 吉 三 郎

(北大理植 吉田忠生)